

森有正を読むということ

森本 あんり

三年がかりでようやく、「人間に固有なものとは何か」を上梓した。「人文科学をめぐる連続講演」という副題が示す通り、哲学・神学・西洋古典学・聖書学・文学・音楽などの諸分野から「人間の人間たるゆえん」を探ろうとした試みである。講演後の討論では異分野間の知的バトルが展開され、さらに各講演者には自分が専門領域に進むきっかけとなった「思い出の三冊」を語ってもらった。彩り豊かな本に仕上がったと思う。

思わぬ発見だったのは、一二人の執筆者のうち三人が森有正の著作を挙げており、討論でもしばしば彼の名が上がった、ということである。晩年の彼とICUとのかかわりからすれば不思議とは言えないが、各人の出合いはもっぱら本を通してのものである。

わたしの出合いもそうだった。あれは大学二年の夏の終わりだったと思う。大学食堂のテーブルを囲んで小さな群れができていた。中心にむっくりとした初老の人がいたが、それが森有正だと聞かされても、わたしにはあまり興味が湧かなかった。森有正というのは、自分が読み続けている本を書いた人の名前であって、その著者を個人的に知りたいとは思わなかった。秋学期には授業を出すのとだった。その秋までの短い間に彼は逝ってしまったので、結局本人には出会わずじまいになった。深い森の中で湖の底に潜ったような気持ち。薄明の中で息をしようともがくが、手足がスローモーションのようにしか動かない。水を通してぐもった声が聞こえてくる。何を言っているのかよくわからないのだが、それをきちんと聞き分けないと、やがて自分は暗黒の底に沈んでしまうのではない。だから必死にそれを理解しようともがき続ける。――森有正を読むということは、わたしにとってそんな行為だった。なぜそうなのかわからない。ちょうど二十歳くらいで、思索の深みや味わいを知り始めた頃だった。「経験」や「促し」という言葉は、自分の生を解釈するのに必須の語彙であった。

森有正のことは、本人と親交のあった多くの人が書いている。エピソードの多い人だったようだが、それにもあまり関心がない。森有正を読むということは、結局そこに書かれたことを自分の個人的内面に構築し直すことなのだ。好きな小説の映画化を見に行くと必ず幻滅を感じるのと同じで、他人の構築した森有正世界は、畢竟わたしには響いてこない。

振り返ってみると、森有正を読んでいるのはわたしの年代までのような気がする。彼は今でも学生たちに語りかける力をもっているのだろうか。というより、そもそも今の学生たちは、自分の人生に決定的な影響を与える本の一節に出会う、などという経験をする必要があるのだろうか。

(もりもと・あんり 国際基督教大学教授／神学)